

戦災モニュメントの造形(1) 1945-1950年 ー沖縄・広島・長崎における同時期の制作活動

末 永 航

Making War Memorials (1) 1945-1950 -Okinawa, Hiroshima, Nagasaki

Suenaga, Koh

はじめに

第二次大戦では、日本の多くの都市が空襲による爆撃を受け、大きな被害を受けた。しかし原爆を投下された広島、長崎、地上戦が行われた沖縄は際だった徹底的な破壊を被った地域だといえる。

これまでこれらの地域では、戦災の記憶を伝えるために、さまざまなモニュメントがつくられてきたが、本稿ではこれをパブリック・アートとしてとらえ、三地域を比較しながら広い意味での建築・彫刻を年代順に概観する。¹

筆者は今後各地域について個別の作品に関する専攻研究の発表を予定しているが、本稿はその序章の意味をもつものである。²

ここで扱う戦災モニュメントは大別すると二種に分かれる。

第一は戦火をくぐって残った建造物を保存する場合である。

原子爆弾という、例のない核兵器の攻撃を受けた広島・長崎では、原爆を受けた、という事実にある意味があり、「原爆遺構」「被爆建物」などの呼称が使われているが、沖縄では当然このような概念はない。

保存にはいくつかの方法があるが、極一部を保存する部分保存、全体を修復・保存する全体保存、改造して保存する活用保存などが行われてきた。

こうした遺構の保存には、戦争の被害を伝えるという機能と、破壊されつくした地域の、戦前の姿を残すという意味があり、「負の遺産」原爆ドームのように前者の色合いが濃い場合と、修復活用する建物に一部弾痕を残す、というような後者の目的が主となる場合がある。

第二は、戦後になって新たにつくられた戦災モニュメントで、数としてはこちらが圧倒的に多い。公園・建築・塔・碑・彫刻など多彩な造形物がつくられてきた。

これらは、戦争被害を記録する、被災者を慰霊する、平和を祈念するという、つながりを持ちながらも異なったいくつかの目的を担い、そのどれかに特化していたり、いくつかの意味を合わせ持っていたりする。

以下本稿では年代順に章を区切り、三地域の比較を行うことにするが、第一部となる今回は1945年から1950年、終戦直後の5年間を扱う。

第一章

沖縄の1945-1950年

沖縄本島では、アメリカ軍が1944年10月10日に実施した「10. 10空襲」で突然徹底的な空爆を受け、那覇市の9

割が消失、さらに後の艦砲射撃や翌年3月23日からの地上戦（沖縄戦）でほとんどのものが破壊された。7月2日、アメリカ軍は作戦終了を宣言している。

戦前の沖縄では、都市部でもともと鉄筋コンクリートの建物が非常に少なく、爆撃や火災に弱い木造建築がほとんどだったため、広島や長崎に比べても残った建物は極めて少ない。

沖縄県庁は、現存する山形県庁舎や慶應義塾大学図書館などで知られる中條精一郎が設計し、議会棟を従えた他県に遜色のない建築だったが、10.10空襲では焼け残ったものの、終戦の年には無くなっている。³

終戦後、既存の建物を修理してしばらく利用した例としては、那覇警察署、日本基督教団首里教会（1935年竣工、84年建て替え）[図1]のほか、那覇市内8校のうち、鉄筋コンクリートだった3つの小学校（国民学校）校舎がある。アメリカの軍政府・民政府として利用された上山小学校、那覇市役所となった天妃小学校、長くアメリカ軍に使用された泊小学校（1930年竣工、春成才之丞設計）がそれで、泊は正面入り口の車寄せ部分だけが現地で保存されている。

また日本勧業銀行那覇支店は、米軍統治下の中央銀行的役割を果たした琉球銀行創立時の本店となった。⁴ 遺されている写真を見ると、曲面に列柱を配した正面のデザインが印象に残る。

沖縄県建築監督官、那覇市建設部長などを勤め、その後沖縄建築専門学校を創立した大城龍太郎が戦前に設計した和風鉄筋建築武徳殿（1938年竣工、89年解体）[図2]、大典寺球陽学園、本島北部金武町の当山記念館（昭和初期、2000年以降使用されないまま現存）も戦後まだ使われつづけた。

同じ金武町には、国頭郡役所にいた技師清村勉が設計した沖縄初の鉄筋建築金武小学校があり、独特の塔が村のランドマークになっていたが、戦後はアメリカ軍の拠点や治療所として利用された。（1925年竣工、82年解体）⁵

沖縄で戦災モニュメントがつくられ始めるのは戦後すぐのことだった。

1946年2月には、最初の慰霊碑といわれる「魂魄の塔」[図3]が建立される。現在は那覇市に編入されている首里真和志村の人たちが、アメリカ軍の指示で摩文仁村（現在は糸満市）米須に移されていたが、村長を勤めた金城和信と妻のふみ为中心となって辺りにうち捨てられている遺骨を集めて納骨所を築き、その上に石碑を建てて「魂魄」の字を刻んだのだった。

この年の4月には、この近くに沖縄師範学校女子部、沖縄県立第一高等女学校の戦没した職員・生徒を祀った「ひめゆりの塔」[図4]が同じ金城夫妻たちによってつくられ、その前の3月には男子生徒のために「沖縄師範健児の塔」が摩文仁に建った。

1950年までに、こうした慰霊碑は本部町、具志川市、勝連町、読谷村、首里を含む那覇市、知念村などにつくられていくが、その数はまだ少ない。

そのほとんどがあまり大きくない石に碑名を刻んだだけの簡素なもので、まだ美術的な要素は感じられない。

また一般的な語感からすれば、高くないものを「塔」と呼ぶことにいくぶんの違和感があるが、沖縄では当初からこの呼称が大半を占めている。

しかし『日本国語大辞典』に拠れば、「塔」とは「stupaの音訳語である卒塔婆（そとば）の略」であり、「インドでは本来、遺骨を埋葬する塚または墓を指したが、釈尊の死後、その遺骨（仏舎利）を安置し、祀るための建造物が作られ、それを指すようになった」とされているので、インドの原義にはこの使い方がより近いのかもしれない。

つまり沖縄の戦災モニュメントとは、まず、実際の遺骨の上につくられた慰霊のための石碑だった。

遺骨そのものは、やがてほとんどが1957年那覇市識名にできた戦没者中央納骨堂へ集められていく。まだアメリカの施政権下にあった時代だが、この施設は日本政府から琉球政府に委託されたものだった。さらに復帰後の1979年、摩文仁に建てられた国立戦没者墓苑に遺骨は移され、その後集骨されたものはすべてここに納められている。

だが、実際に遺骨がその下になくとも、沖縄の「塔」にとって最もたいせつなことが慰霊であることには変わりがない。

県や外郭団体が何度もモニュメントの一覧・ガイドブックを発行しているのも沖縄の特徴だが、その中でももっとも版を重ねた冊子は『沖縄の霊域』と題されていた。個々の碑の紹介では、たいていそこに祀られている御柱の

数が明記されている。

やはりモニュメントは骨と霊に出会う場所なのである。⁶

第二章

広島1945－1950年

1945年8月6日世界で初めて原子爆弾が広島に投下された。町並みの大部分を占めていた木造建造物はほぼすべてが一瞬で崩壊したが、中心部にあった大企業の事務所などはすでに鉄筋コンクリート造だったこともあり、損傷を受けながらも跡形もなくなったというわけではなかった。

「爆心地から半径5キロメートルの範囲で、被爆直後、何らかの形を残し確認できたものは156件」あり、その内鉄筋コンクリート造が85件、煉瓦造が48件、鉄骨造が22件、石造1件だったという。⁷

爆心地にあった島病院（設計者不詳、1933年）は構造が煉瓦造であったこともあってほぼ完全に壊滅した。広島瓦斯本社（設計者不詳、1922年竣工）、時計塔が名物だった下村時計店（設計者不詳、1928年竣工）など、被爆直後の写真に無残な残骸としての姿を残し、取り払われたものもある。

しかし相当数の建築が改修を受けて使いつづけられた。戦後すぐの広島は、バラックとビルが焦土に隣り合い、瓦屋根の家並みがつづく空襲を受けなかった一般的な日本の都市とは、異なった様相を呈していた。

爆心地から2、3キロ離れた地域では、煉瓦造りの倉庫や工場も残った。広島電鉄千田町変電所（設計者不詳、1912年竣工）、広島陸軍被服支廠（設計者不詳、1913年竣工）、広島陸軍糧秣支廠（設計者不詳、1911年竣工、現広島市郷土資料館）などは現存している。

ともに明快なモダンイズム建築だった広島通信病院（1935年竣工、通信省・山田守設計、旧外来棟は被爆資料室として現存）、広島赤十字病院（1939年竣工、1993年解体・一部保存、佐藤功一設計）⁸は、被災者の治療に大きな役割を果たす。

大阪、後に東京に本拠を置きながら広島市の嘱託として重要な建築を設計した増田清の燃料会館（1929年竣工、竣工時は大正屋呉服店、平和記念公園レストハウスとして現存）、本川小学校（1928年竣工、1987年解体・一部は本川小学校平和資料館として現存）、広島市役所（1928年竣工、1985年解体・地下室の一部を保存）、日本勧業銀行広島支店（1931年竣工、1980年解体、竣工時は広島県農工銀行本店）はいずれも戦後改修を受けて使われた。⁹

このほかにも、戦後生き残った建築はかなりの数にのぼる。主なものを挙げてみるが、東京や関西の著名な建築家の作品も多い。

モダンな塔をもつ広島商工会議所（1936年竣工、1964年解体、今井兼次・小田能清設計、被爆時は「広島商工経済会」）、千代田生命広島支社（1928年竣工、1970年解体、宗兵蔵設計）、農林中央金庫広島支所（1920年竣工、1965年解体、清水組・西村好時設計）、広島銀行集会所（1935年竣工、1972年解体、竹中工務店設計）、イオニア式のジャイアント・オーダーが偉容を誇った芸備銀行本店（1927年竣工、1962年解体、建築興業設計、解体時は広島銀行本店）、原爆の黒い影でも有名になった住友銀行広島支店（1928年竣工、1971年解体、住友合資工作部・竹越健造設計）[図5]、日本銀行広島支店（1936年竣工、現存、日本銀行臨時建築部・長野宇平治設計）、広島流川教会（1927年竣工、1971年解体、W. ヴォーリス・内藤多伸設計）[図8]、山陽記念館（1935年竣工、1994年解体、佐藤功一設計）、大林組広島支店（1923年竣工、渡辺節設計、2002年解体、竣工時は鴻池銀行広島支店、解体時は山口銀行本通支店）、福屋百貨店（1938年竣工、渡辺仁設計、現存）、明治生命広島支店（1929年竣工、1970年解体、桜井小太郎設計）、広島東警察署（1937年竣工、88年解体・玄関の一部保存、設計者不詳、竣工時は広島合同貯蓄銀行本店）、などがあった。¹⁰

しかしこれらの建築は、ごく一部現存するものを除いて、広島が復興し、日本が高度成長期を迎えるにつぎつぎに解体されていくことになる。

現在は「原爆ドーム」と呼ばれ、世界文化遺産に指定されている広島県産業奨励館（1915年竣工、ヤン・レツル

設計、竣工時は広島県物産陳列館) だけは、建物として利用されることなく、原爆被害を証言するモニュメントと化していった。

残骸となって残されたままの原爆ドームについては、早く取り払うべきだという意見と保存すべきだという考えが両方あり、なかなか決着がつかないまま、徐々に原爆の象徴としてのイメージが定着する。

1948年に広島観光協会が市内13か所を「原爆名所」に選定し、保存を求めたが、その中に「元産業奨励館」が入っている。同じ協会がこの建物を保存するかどうか、世論調査をしたところ、604通のうち、保存賛成が436、反対が168あった。しかし同年10月10日の『夕刊ヒロシマ』は、「このような悲惨以外のなにものでもない残ガイを都市のド真ん中に放置したまま足かけ4年 ー自分のアバタ面を世界に誇示して同情を引こうとする貧乏根性を広島市民はもはや清算しなければならない」と書いているという。

翌年広島市が被爆者500人にアンケート調査した結果では保存賛成が62%だったが、広島にきた山下寿郎日本建築士会会長が「取り払った方がいい」と発言、『中国新聞』夕刊のコラムも「あまりにも惨めすぎないだろうか」と書いた。¹¹ しかし11月29日広島県議会は原爆ドームを文化財保護法に基づく史跡に指定するよう要望することを決議しており、¹² まだ評価は揺れ動いていた。

「原爆ドーム」という名称は、新聞紙上では1950年6月23日付け中国新聞が初出だとされているので、このあたりで定着してきたものらしい。¹³

現在、広島を中心街本通りに残った唯一の被爆建物となった三井銀行広島支店(1925年竣工、長野宇平治設計、被爆時は「帝国銀行広島支店」)[図6・7]は、現在パンの大手アンデルセンの旗艦店として親しまれているが、被爆した当時は一部壁面を残すだけの状態で、原爆被害の象徴として原爆ドームを残すか、これを保存するか、議論になったという。¹⁴

広島石碑として、おそらくいちばん早くつくられたのが、郊外の戸坂、桜ヶ丘墓地にある供養塔である。被爆の2か月後の1945年10月に建立された。戸坂の小学校には陸軍病院の分院があった。ここに被爆した人が数多く避難し、2、3日の間に600人ほどが死亡、この辺りで火葬されたが身元不明の人も多く、遺骨を埋めた場所に碑がつくられた。

元騎兵隊裏門の石柱を利用し「供養塔」という文字を刻んだだけで、形はごく一般的な墓石と同じだが、かなり大きい。広島でも石碑の始まりは、文字通りの墓標だったことになる。ただし手作りの感じはなく、技術をもった専門業者が製作したもののように見える。遺骨はその後の1959年、平和公園の供養塔に納められて現在はここにはない。¹⁵

建立年ごとににもおなものを挙げる。

1947年：

- ・中心部土橋の浄国寺墓地にある簡素な広島県防空機動隊員慰霊碑と西地方町・西新町町民慰霊碑

1948年：

- ・寺町の(西)本願寺広島別院にある中国配電職員弔魂塔
- ・天満川河畔の広島市立中学校原爆三百六十九霊塔(75年三光寺より移転)
- ・当初は校内にあった元安川河畔の市立高等女学校慰霊碑

1949年：

- ・日生ビルの日本生命保険職員殉職碑
- ・国泰寺高校内の県立広島第一中学校追憶の碑
- ・市街の中心部にあり「とうかさん」として親しまれている円隆寺の三川町民慰霊碑、別名「子守り地藏」

1950年：

- ・比治山のNTT電信施設所内の電々搬送通信部職員慰霊碑¹⁶

だんだんと職場や学校単位の慰霊碑が増えていくのがわかるが、占領期のこの時代には「原爆」という文字を使うことに規制があったり、県が学校内に慰霊碑を建てることを許さないという通達を出したりと、特有の困難があ

り、その中で徐々に祈念碑がつくられていった。

デザインとしてはほとんどが石碑に文字だけを刻んだものだが、広島市立高女（現在の市立舟入高校）慰霊碑〔図10〕だけは、彫刻を中心にした構成をとっている。モンペと制服姿の三つ編みの女学生3人が掘り出されたかなり肉厚の浮き彫りで、左右がそれぞれ慰霊の花輪と平和を表す鳩を手に行っている。中央の生徒が持つ箱にはE=MC²という原子力エネルギーの記号が見える。この図像の構想は物理学者湯川秀樹によるものだという。¹⁷ 碑文によると、浮き彫りの作者は河内山覚祐という人物で、「あなたは原子力の世界最初の犠牲者として人類文化発展の尊い人柱となったのです」と慰めている姿を表しているという。この当時はこうした考え方が珍しくなかったらしい。

石碑以外でこの時期につくられたモニュメントはまだほとんどない。1949年に中央児童公園にできた広島銅合金鑄造組合平和の鐘は、組合が焼け跡から集めた金属を鑄込んで製作した鐘を金属製の高い枠につるしたもので、原爆記念日の平和祭ではこの鐘が鳴らされた。この鐘は「当時、広島のシンボルとして扱われた」という¹⁸。

平和祭のためには、「平和塔」と大書した塔をもつ仮設舞台のような木造の施設がつくられ〔図9〕、使用された。いつまで存在したのか確定できないが、この塔が戦後初めてのやや大きいパブリック・アートだったといえるかもしれない。

初期の平和祭は、花電車や山車が出て演芸大会や徹夜の盆踊りが催され、異様に明るなお祭り騒ぎを伴っていた。アメリカ占領軍のプレスコードによる検閲が行われていたし、自主的な遠慮や追従の部分もあったかもしれないが、当時の広島の一般的な考え方として「原爆投下は第二次世界大戦の終結を導くと同時に、その破壊力の大きさゆえに、その後の戦争をも抑制する。その起点として広島は位置づけられ」、「『世界平和を将来する』という自負が込められた」「明るさ」だったと福間良明は指摘している。

広島のカトリック教会（幟町天主教会）は、原爆で灰燼に帰したが、ドイツ人のラサール神父も被災した。しかし失われた聖堂を建て直そうと世界から寄付を募り、1948年設計競技（コンペ）によって設計を決めることになった。応募者は日本人に限ったが、1000人の建築家に案内を出し、200人から反応があったという。朝日新聞東京本社が事務局を勤め、全国的な注目を集めた。

177通の応募があり、結果は1等なし、2等に井上一典と丹下健三というもので、結局実際には審査員だった村野藤吾が設計することになり、1954年になって完成する。

できあがった作品世界平和記念聖堂は日本の近代建築史上最高の作品のひとつともいえるもので、後に丹下健三の広島平和記念資料館とともに戦後の建築として初めての重要文化財に指定されることになる。しかしこれだけ大規模なコンペを実施しながら、応募作は採用されず審査員が別の設計をするという、一面では不公正な運営がなされたことは、厳しい批判を受けることになった。

丹下健三は大阪で生まれ、愛媛県今治で育ち、旧制高校時代は広島で過ごした。戦中まではいくつかのコンペに当選し東京大学の助教授になっていたが、まだ実現した建築はほとんどなかった。若い日の思い出の多い広島のコンペには意気込んで参加し、最高賞に選ばれながらこのような結果になったわけで、悔しさをかみ締める思いだったにちがいない。

丹下夫人となる加藤とし子は「あの頃、丹下が一番誰かに訴えたかったこと、でも誰にもいえなかったことは、広島カテドラルのコンペのことだと思います。（中略）戦後はじめてのコンペ、それも彼の広島で…。でも審査員の先生がお建てになりました。（中略）こんなことがまかり通る建築家の社会的地位の低さ、本当になぐさめようもありませんでした。」と回想している。¹⁹

太田川河口の三角州にある広島市街地には、いくつかの丘を除けば起伏がない。一発の原爆によって、市街地のほとんどが壊滅した。残されたものが少なかったから、戦後の復興・都市計画では新しい、かなり大胆な構想を実現することができた。

被爆後半年も経たない1946年1月、広島市は復興局を設置し、市民の意見を反映させるために復興審議会を設けた。広島をどういう都市として復興させるか、意見は分かれたが、「一つおもしろいことには、“平和都市”にしよ

うという点で、全委員の意見が一致した」という。²⁰

幅100メートルの大通りをつくることや、広島城周辺の広い地域を中央公園として整備することなどが決められていったが、爆心地に近い中島を平和記念公園する計画も含まれていた。古くからの町の中心部だったこの地区を全部公園にしてしまうという案には反対もあったが、市長となる浜井信三は「昔から水の美しい町として、臨水公園をつくりかった」という。²¹住民を説得してこれを実現していく。

1949年の原爆記念日8月6日、広島の復興を国が支援するための特別立法がなされ、「広島平和都市建設法」が公布された。国は長崎もふくめたこの運営のために9月9日、建設大臣を委員長とする平和文化都市建設協議会を設置、これを受けて広島市は翌年10月に「主として東京在住の学識経験者と県市の職員」からなる広島平和記念都市建設専門委員会をつくった。

協議会に提出された事業計画によると、5年間で戦災復興、道路や港湾、観光や厚生施設その他に総計276億円を支出する予定だったが、そのうち「平和記念施設」に約7億円を充てていた。²²

平和記念公園の設計は1949年、設計競技で選ばれることになり、一等は丹下健三に決まる。聖堂の雪辱を果たした丹下はこの作品で世界の建築界に衝撃をもたらすことになるが、この建築が竣工するのはまだ先のことになるので、次回の本稿で扱うことにする。

第三章

長崎の1945－1950年

長崎に原爆が投下されたのは、1945年8月9日、広島の日後だった。

広島と長崎では地形も異なり、原爆被害がほとんど工業地域と古くからのカトリック信者や被差別部落のコミュニティを抱える浦上地区に限定され、都市の中心部は大きな損傷を受けなかったことも広島と違う。広島では原爆は全市挙げての問題だったが、長崎ではいわば一部地域に起こったことにすぎなかった。

爆心地近くの建築で、大きな損傷を受けながら残ったものは、城山小学校（1923年竣工、80年・84年解体・一部保存）、鎮西学院中学校（現活水学院中学校・高等学校）（1930年竣工、現存）などだが、原爆後の火災によって大きな被害を受けたカトリック中町教会（1897年竣工、バビノー宣教師設計、現存）など他の地域にもいくつかの例がある。

長崎では被爆直後から慰霊塔の建設を提案されたり、市議会で被害物の保存が検討されたりした。また、標識塔・原子爆弾被害者霊塔などの提案があり、五階建ての塔の建設を市長が計画するなど、1948年までの間にさまざまな案があったが、いずれも実現はしなかった。²³

長崎の被爆をめぐっては、『長崎の鐘』などの著作で全国に知られた長崎大学医学部教授永井隆というキャラクターの存在があまりにも大きい。1951年に亡くなった永井がそれまで暮らした如己堂という小さな住居が保存され、多くの見学者を集めており、これが重要なモニュメントとしての機能を果たしている。

だが、モニュメントを考える上で大きな意味をもつのは、浦上地区の中心に聳える浦上天主堂だろう。

現在の建築は戦後1959年に献堂された鉄筋コンクリートの大規模なものだが、被爆したのはその先代の聖堂で、1895年から1925年まで完成に30年かかった「東洋一の教会」だった〔図11〕。

爆心地に近く、残骸がそこに残る状態になったが、原爆ドームのような廃墟としては、被害を物語る十分な力をもっていた。原爆ドーム同様、保存がすぐ決まったわけではなかったが、保存を求める声が大きく、その方向に向かうかに思われた。しかし市長がアメリカの姉妹都市を訪問してから急に方針を転換し、1958年になって取り払われることになる。²⁴

おわりに

今回概観した戦争直後の5年間にはまだ目立った造形活動は見られないが、戦災モニュメントの原点が一種の墓標だったことが確認できる。また後に戦災遺構とされるものの状況にも、3地域の特徴がすでによく現れており、それぞれの出発点をみることができた。

注

- 1 三地域を併記する際の順番は被災の年代順による。広島、長崎はそれぞれの都市区域を対象とするが、沖縄については首里・那覇だけでなく、主な記念施設の集中する南部をはじめ、本島全体を扱うこととする。
- 2 本稿は、2011年度・2012年度広島女学院大学学術研究助成費（個人）を受けた「広島を中心とする戦後日本の公共空間美術における計画・制作・受容過程の比較研究」の成果にもとづく。
- 3 石田潤一郎『都道府県庁舎－その建築史的考察』思文閣出版、1993年、325、424頁。ここでは1920年10月まで存在したとされているが、最後の官選沖縄知事島田叡は1945年1月31日に「焼け残っていたこの県庁舎」に出勤（「島田知事沖縄日誌」『沖縄の島守島田叡 親しきものの追憶から』島田叡氏事跡顕彰会、1964年、270頁）、「全職員が玄関前広場に出て新知事を迎えた」（田村洋三『沖縄の島守 内務官僚かく戦えり』中央公論社、2006年、156頁）という。しかし3月24日には県庁を軍司令部のある首里に移動せざるを得ない状態に陥る（前掲「島田知事沖縄日誌」271頁）。
- 4 刊行時点で那覇支店が廃止されていたのか、『日本勧業銀行七十年史』（日本勧業銀行、1967年）にはこの支店と建築について記載がないが、全国の「農工銀行」を同行が合併していった第一次分に沖縄県が含まれていたという（18頁）。琉球銀行は1948年5月1日に「那覇市東町1丁目10番地にて創業。元日本勧業銀行及び隣接する元鹿児島興業銀行の各那覇支店跡廃墟を緊急改修のうえ営業を開始」したが、52年に増築、66年に現在地の久茂地に新築移転した。（『琉球銀行三十五年史』琉球銀行、1985年、543頁）
- 5 刊行当時現存する大正昭和戦前期の建築の一覧表の中で、沖縄本島の掲載物件は8件、全県でも14件にすぎず、他県に比べて際立って少ないが、基礎的データはこれに拠った（日本建築学会編『新版日本近代建築総覧』1983年、技報堂出版、413頁）。因みに、長崎県からは227件が掲載されている。また金武小学校については、『金武町史 第二巻戦争・本編』金武町教育委員会、2002年、205、240、241頁を参照した。
- 6 『沖縄の霊域』は、国会図書館で検索できる限りで1962年（編集・発行：沖縄戦没者慰霊奉賛会）、65年（同）、74年（沖縄県）、81年（同）、83年（同）に刊行されている。その後は『沖縄の慰霊塔・碑』（沖縄県、1995年が発行され、同書の改訂版が2007年に沖縄県平和祈念財団から出された。慰霊碑については、これほか、大田昌秀『沖縄の「慰霊の塔」 沖縄戦の教訓と慰霊』那覇出版社、2007年、小亀重男『戦後五十周年祈念沖縄戦 戦没者慰霊碑（塔）写真集 一兵卒が観た沖縄戦の真相』（私家版）、1995年を参照した。
- 7 このうち、2006年の時点で現存するものが37件、一部保存されているものが14件あった。山下和也・井出三千男・叶真幹『ヒロシマをさがそう ー原爆を見た建物』西田書店、2006年、56頁。
- 8 この病院についての追憶と保存運動の経緯については、いのちの塔手記編集委員会『いのちの塔 ー広島赤十字・原爆病院への証言』中国新聞社、1992年を参照。
- 9 増田については李明・石丸紀興『近代日本の建築活動の地域性 ー広島近代建築とその設計者たち』溪水社、2008年、37-67頁参照。
- 10 以上広島の被爆建物のデータは、被爆建造物調査研究会編『ヒロシマの被爆建造物は語る ー未来への記録』広島平和記念資料館、1996年に拠る。
- 11 以上原爆ドームに関する事項は、中国新聞社編著『ユネスコ世界遺産 原爆ドーム ー21世紀への証人』中国新聞社、1997年133-134頁の詳細な年表に拠った。日本建築士会会長の氏名は「山下泰郎」とあるが、おそらく「寿郎」の誤記。

- 12 広島県編『原爆三十年 ―広島県の戦後史』広島県，1976年，460頁。
- 13 雨宮忍「緑地帯 ドームの軌跡⑥」（『中国新聞』2004年8月3日）。
- 14 前掲『ヒロシマの被爆建造物は語る ―未来への記録』，74頁。
- 15 宅和純『ヒロシマの碑』広島県教育用品、1996年，196頁。
- 16 以上，広島のマニュメントに関するデータは同書に拠る。
- 17 同書，24頁，および 黒川万千代『原爆の碑 ―広島のことろ』30頁に拠る。
- 18 宅和純，前掲書，260頁。宇吹暁『平和記念式典の歩み』広島平和文化センター，1992年，48-49頁。
- 19 豊川斎赫『丹下健三とKENZO TANGE』オーム社，2013年，828頁。
- 20 浜井信三『原爆市長』朝日新聞社，1971年，64頁。
- 21 同書，66頁。
- 22 戦災復興事業誌編纂委員会ほか編『戦災復興事業誌』広島市都市整備局都市整備部区画整理課，1995年，53頁。
- 23 長崎のこうした計画については，末廣眞由美「長崎平和公園 ―慰霊と平和祈念のはざまで」（小佐野・木下編『死生学4 死と死後をめぐるイメージと文化』東京大学出版会，2008年，199-232頁を参照。建築のデータについては前掲『新版日本近代建築総覧』，『被爆建造物等の記録』長崎市，1996年，長崎の原爆遺構を記録する会編『原爆遺構 長崎の記憶』海鳥社，1993年に拠った。
- 24 近年この間の事情を掘り起こしたノンフィクション作品が出版され，残っていた鮮明な廃墟の写真も刊行され注目されている。高瀬毅『ナガサキ 消えたもう一つの「原爆ドーム」』，平凡社，2009年，高原至写真・横手一彦文『長崎 旧浦上天主堂 1945-58 失われた被爆遺産』岩波書店，2010年。



図1 砲爆撃を受けた首里教会。(大田昌秀『那覇10・10 大空襲 日米資料で明かす全容』1984年、久米書房、93頁所載)

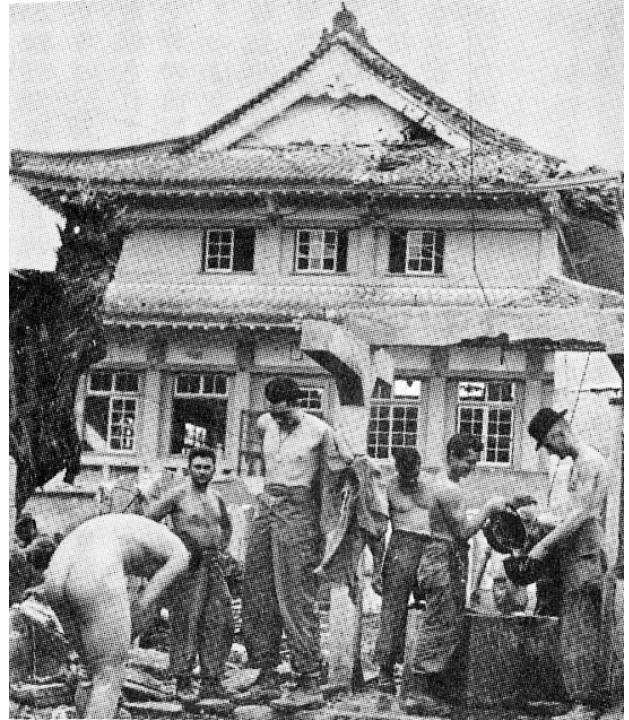


図2 戦後の武徳殿。(大城龍太郎『風雪70年反骨建築士の自伝』1978年、大龍建築設計、69頁所載)



図3 魂魄之塔。(『沖縄の慰霊塔・碑』2007年、沖縄県平和祈念財団、25頁所載)



図4 ひめゆりの塔。右の小さな石碑が当初のもの。筆者撮影。



図5 被爆約2月後の紙屋町交差点付近。芸備銀行本店、住友銀行など。(被爆建造物調査研究会『被爆50周年ヒロシマの被爆建造物は語る』1996年、広島平和記念資料館、63頁所載)



図6 建設当時の三井銀行広島支店。(前掲『被爆50周年ヒロシマの被爆建造物は語る』75頁所載)



図7 被爆後の帝国（三井）銀行広島支店。(現広島アンデルセン)。1945年8月下旬。(前掲『被爆50周年ヒロシマの被爆建造物は語る』75頁所載)



図8 被爆約2年後、やや復旧した広島流川教会。(前掲『被爆50周年ヒロシマの被爆建造物は語る』99頁所載)

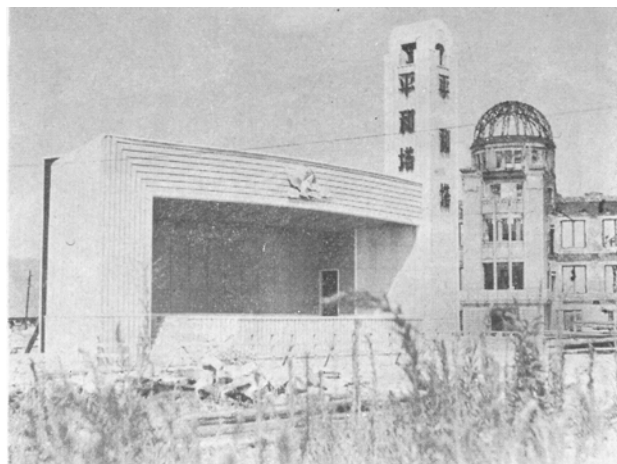


図9 平和祭用の舞台とともに設置されたエフィメラ（仮設）のモニュメント「平和塔」。(『原爆三十年ー広島県の戦後史ー』1976年，広島県，188頁所載)



図10 広島市立高等女学校慰霊碑。福田道宏氏撮影。

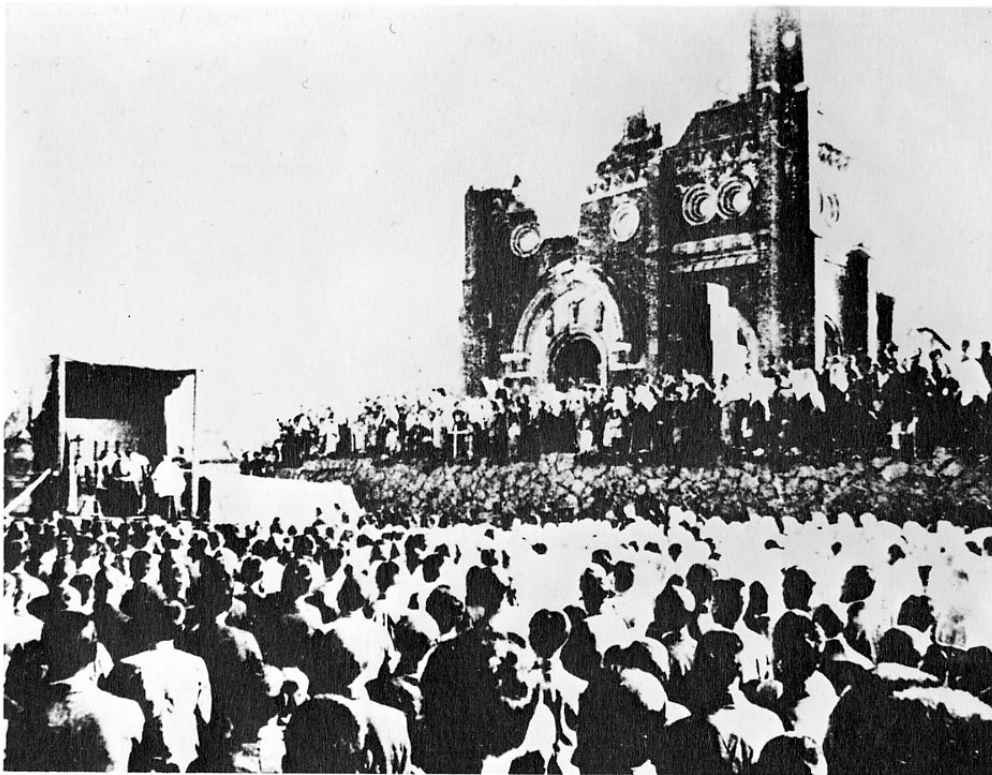


図11 浦上天主堂の廃墟で行われた合同慰霊祭。1945年11月23日。(西田秀雄『神の家族400年・浦上小教区沿革史』1983年、浦上カトリック教会、111頁所載)